



『旅の仲間(下)』J.R.R. トールキン作
瀬田貞二 訳 (評論社 1972~75年
『指輪物語』全6冊中の2冊目)

※現在、この版は入手できません。
同社より新版が刊行されています。

『指輪物語』 — 創造世界の魅力 —

評者

荻原万紀子
(教員)

幼少の頃、信州の田舎に行くと、小学校教員だった叔父がよくお話を聞かせてくれた。後年、小泉八雲『怪談』のリメイクであったことがわかったが、主人公はいつも私たち姉妹で、昔のどこかの住人になっていた。私たちはハラハラドキドキしながらお話を聞いていたものだ。今のこの現実ではない、どこか別の世界の住人になることは、それだけで心ときめくものがあった。

大学生になって、神田の本屋さんを訪ねるたびに目に入り「中学生から一〇〇歳まで」のうたい文句が気になっていた、しかし長そうな(当時六冊)『指輪物語』を読むことになったのは、三年生の冬休みだった。休みに入る前に友人が最初の二冊、『旅の仲間(上・下)』を貸してくれたのだが、そのときの彼女の言葉は忘れられない。

「始めの三十ページは後で読めば面白いが、まずは飛ばしてよい。この二冊を読んで面白

荻原万紀子 (おぎはらまきこ)

お茶の水女子大学附属高等学校元教諭(国語科)。NHKラジオ「高校講座古典」講師。今春大阪に引っ越してきました。文楽の楽しさを皆さんに知っていただきたいです。1954年生。

かつたら、後も貸してあげる。つまらなかつたら後は読まないほうがよい」

この賢明な忠告を、以後、私もこの物語を人に薦める（あるいは貸す）たびにまねた。

律儀（愚直）な私は、始めの三十ページ（序章）を、投げ出しそうになりながら何とか読んだ。その後はもう夢中である。「黒の乗り手」が恐ろしく、「馳夫^{はせお}」の登場に緊張し、「カザド・デムムの橋」では魂がつぶれ、まさに作者の狙い通りに「はらはらせ」られて瞬く間に二冊を読み終えた。それが元日のことである。「どうなるんだ、この後は!」「どうしてくれるんだ!」賢明で親切な友人を呪いながら三が日を堪えて、四日に本屋に走った（当時、三が日はみんな普通に休んでいた）。この年末年始の休暇は一家で信州に帰省していたのだが、上信越道などない時代、車の旅は確水峠をバイパスで越えていた。帰途、父が運転する車の中で、カーブの連続にもめげずに

読みふけり、家族をあきれさせた。

こうしてこの年の冬休みは終わった。貸してもらった最初の二冊も自分で買って、また全部読み直したことは言うまでもない。

物語の成り立ち

二十世紀最大のファンタジーといわれ、『ハリーポッター』はじめその後のあらゆるファンタジーに影響を与えているこの作品の魅力は何だろうか。

よく知られているように、言語学者であったトールキンは、古代の響きを持つ美しいエルフ語を創り出し、その言語を使わせるために神話を創った。従って、没後に発表された『シルマリルの物語』などは、『指輪物語』や『ホビット』（邦題『ホビットの冒険』）よりも（断片的には）先に生み出され、彼の子どもたちに語り聞かせられていたようである。トールキンは書簡の中で、母国イギリスが他

の国々と異なり、「質の良い」「固有の物語」を持たないことに若い頃から心を痛めていたことを記し、「壮大な宇宙創造の物語から、ロマンチックな妖精物語に至るまで、多かれ少なかれ一貫性を持った伝説の体系を創ろうと思おう。純粹に私の国イギリスに捧げるために」と語っている。子どもの頃から北欧神話に興味を持ち、その興味が高じて研究者になった彼は、早くから壮大な神話体系を創り上げようとしていたのだ。そしてその中からホビットという種族が生み出された。

これもよく知られている（伝説化されている？）ことだが、オックスフォード大学で学生の答案に飽き飽きしていたトールキンは、白紙で出された答案用紙を見てほっとして（このくだりに突っ込みを入れることは避けておく）、「地面の穴のなかに、ひとりのホビットが住んでいました」と書きだした。

こうして『ホビット』が誕生、一九三七年

に出版されるのだが（そしてその好評から続編としての『指輪物語』が書き始められることになるのだが）、『ホビット』執筆中に、トールキンには次の構想が生まれていたようである。だが『指輪物語』が刊行されたのは一九五四～五五年であるから、この執筆には二十年近くを要したことになる。

もちろん『ホビット』も十分壮大でワクワク感のあるファンタジーである。登場人物（人とは限らないが……以下同様）の魅力、全編にわたるユーモアセンスも申し分ない。旺盛な食欲が肯定されているのもうれしい（私はこれを読んだ後、朝食にベーコンエッグを作りがたがるようになった）。このお話は、冒険物語としての約束を踏まえている。主人公の成長、重要人物の死、ハッピーエンド、そしてたまたま主人公にもたらされてその助けを受けることになる「魔法の○○」。

しかし『指輪物語』の中心に据えられるこ

とになった魔法の指輪は、単なる便利で不思議な指輪ではなくなった。それは「すべてを統べる」「一つの指輪」である。作り主にして力を取り戻しつつある冥王サウロンの手に渡してはならない。しかも、持つ人に邪悪な力を与えるこの指輪を自分のために持つことも許されず、サウロンの本拠地モルドールにある「滅びの山」の火口に投げ込んで焼却することだけが取り得る道である。その任務を自ら担ったホビット、フロドを中心に九人の仲間が結成される。

作品の魅力

『指輪物語』は善悪の二項対立で成っている。ただし、その善も悪も絶対的ではない。サウロンも墮落した身であり、初めから悪の冥王であったわけではない。魔法使用中、最も力を持っていた白の賢者サルマンも、力と知識を求めた結果、墮落した。まして指輪が手中

にあるこの状況下、指輪の力でサウロンと戦いたい欲求は誰にも生まれ、葛藤することになる。フロドから指輪を奪おうとするボロミアも、私利私欲でそうしたわけではない。そして、フロド自身も例外ではない。

この物語の世界は、勧善懲悪でもハッピーエンドでもない。

私たち自身が生きている世界も勧善懲悪ではあり得ない。悪い奴がのさばっている（ような気がする）し、努力をしても苦労をして、それが報われるとは限らない、いや、報われないことが多い。だが、それでも（ことによるとダメ元でも）自分がするべきだと思つたことを放置することはできない。フロドが「やつとの思いで口を利」いたように——わたしが指輪を持つて行きます——。

私たちは、他の誰でもない、自分が自分に課した戦いを生きなければならぬ。邪魔が現れないことはないが、援助の手も差し伸べ

られる。その邪魔者も援助者もまた自分たちの戦いをしているのだ。ポロミア・フアラミア兄弟のように。そしてポロミアは、指輪への渴望から墮落しかかるが、最後に命を犠牲にして若いホビットたちを守ることによって「打ち勝った」(アラゴルンが贈った言葉)。

この物語の魅力はさまざまあり、構築された世界の体系、そしてそれがヨーロッパ北方の神話・伝説を踏まえていること、また登場人物(伝承の人物たちも含めて)の多彩さ、もちろん、エルフ語やルーン文字等ツールキンの創作になる言語……きりなく挙げられるのだが、私自身にとっては、何よりも、現代を生きる私たちの人生を照らすものであることだ。

使命を果たしたフロドは、つかの間の安息を得るが、それも長くは続かない。

私たちは何かを達成しようとして努力をする。運良くそれが達成できれば満足を得られ

る。だが、それで終わることはない。次の課題が目の前に現れる。その繰り返しが生き甲斐なのか徒勞なのか、おそらくその両方なのだろう。

若かった頃は、かっこいい人に目を奪われた。ガンダルフ(女子大生としては渋いか?)、アラゴルン。今も彼らは大好きだが、フロドの思いが身に染みる(映画ではその要素は捨象されていたけれども)。ポロミアの思いも胸に迫る。人生のいろいろな時期にいろいろな味わいを楽しめるのが、名作というものだろう。これだけ長い物語を何度も読ませるところも、この作品の力というものに違いない。

人間Ⅱ創造する生き物

敬虔けいけんなクリスチャンであったツールキンによれば、神によって創られたこの現実すなわち「第一の世界」に生きる人間は、神から与えられた空想力などの能力によって「第二の

世界」を創り出す。トールキンはこのような人間の行為に、神の創造の業に準ずるものとして「準創造」の名を与えた。そして『指輪物語』執筆の一番主な動機は、「本当に長い話で腕試しをしたいという物語作家の欲求である」という。「読者の注意をひきつけ、おもしろがらせ、喜ばせ、はらはらさせ、あるいは深く感動させるような長い話を書いてみたいと思ったのである」と。

最後に、翻訳について触れておきたい。すっかりこの世界にはまった大学生の私は、原作を買ってみた。音韻面も日本語訳（瀬田貞二氏）はよく工夫してユーモア感も失わないように訳されていたが、詩になると押韻はいかにも難しく、原作でリズムを味わうのが最良だった。しかしながら、この比較で私に最も感動を与えたのは、日本語訳の妙である。私の魂をつぶした「カザド・デュムの橋」。バルログに襲われて絶体絶命の場面、一行を

率いるガンダルフは、単身この怪物に立ち向かい、「きさまは渡ることはできぬ」と言う。このセリフを原典で見ると、“You can not pass.”なのだ。なんか違わないか？ と英語文化に不慣れた日本人として思う。彼はこのセリフを三度言うのだが（三度目だけ「！」がつく）、瀬田氏の訳では、二度目が「きさまは渡れぬぞ」、三度目そして最後は「きさまは通すことができぬ！」——この使命感・意志力みなぎる訳し方はどうだろう。

こうしてみると、翻訳も創作の要素がありそうだ。

神に似せて作られた人間は、創作が不可欠の生き物なのだ。私たちも、子どもにお話をするとき、あるいは家族に今日あった話をするときでさえ、ささやかな味付けをしていることが多い。だって面白いと思つてほしいから。

確かに人は新しい世界を創り出す生き物であるに違いない。